

星条旗が校庭から消えた日 ——1956年アメリカ南部テキサス州マンスフィールド高校 人種統合事件

片 桐 康 宏

Summary

Aiming to fill a scholarly void in the dominant American civil rights historiography, as well as in the history of the white South's massive resistance, this article sheds light on a virtually overlooked, but nevertheless significant, school desegregation crisis that engulfed the small rural community of Mansfield, Texas, in the wake of the 1954 U.S. Supreme Court's *Brown* ruling. All too often, the general narrative of the civil rights movement has focused on black southerners' struggles to desegregate public schools and public accommodations waged in the Deep South states such as Louisiana, Mississippi, and Alabama, and it has, whether intended or not, resulted in drawing much needed attention away from the similar endeavors that occurred in the Peripheral South states during the civil rights years. In this respect, Texas, as one of those Peripheral South states, and what happened at Mansfield High School in the late summer of 1956 were no exceptions. Although history attests that the efforts to desegregate Mansfield High School came to naught in the end and that the school remained racially segregated for nine more years until 1965—and thus, the whole civil rights episode seems to have been relegated to a historical footnote—the 1956 Mansfield incident in fact served as a crucial, albeit little-known and unhailed, precursor to the well-documented Central High School desegregation ordeal in Little Rock, Arkansas, that happened only a year later. This was then followed by the proliferation of similar school desegregation crises in the Deep South states during the early 1960s.

1. 問題の所在

20世紀半ばの1950年代から1960年代にかけて、他のアメリカ南部諸州と同様にテキサス州も、黒人による市民・公民権獲得闘争と、政治家と公職者に率いられた白人による「マッシュ・レジスタンス」(massive resistance)と呼ばれた抵抗運動が、激しく対峙をした南部州であった。しかしながら、このテキサス州は、黒人公民権運動史ナラティブや同運動史ヒストリオグラフィーにおいて、他の南部諸州との間の比較の問題として、これまで研究者による十分な史的検証が行われてきた州であるとは言い難い。この点、特に、1956年晩夏に同州の小都市であるマンスフィールドの公立高校 (Mansfield High School) において生じた、白人・黒人間の人種統合 (人種共学) への移行計画を巡る事件 (しばしば、「マンスフィールド高校事件」と称され、後述する如く、結果としては1965年秋に至

るまで、人種統合の実現を見ない)は、後の1950年代後半と1960年代前半に南部他州の諸都市を巻き込み、黒人公民権運動史において多くが語られることとなる同様の出来事の、いわば「プレリュード」としての位置付けがなされて良いにもかかわらず、アメリカ南部史家、黒人公民権運動史家による考察、解釈が、不十分なままであることは否めない。公文書やパーソナル・ペーパーズを始めとする一次史料は言うに及ばず、書籍や論稿等の二次史料に至っても、今日から数えて60年以上前の1950年代半ばに、テキサス州の一小都市であるマンスフィールド(「都市」というよりも、農業や穀物製粉業を中心とした「田舎町」の如き存在であった)の公立高校で生じた、人種統合事件に関する史料は、その量の点においてまさに僅少であり、この事実こそが、学者、研究者の多くを、研究主題としての「マンスフィールド高校事件」から、必然的に遠ざけてきてしまった最大の理由であるものと推察出来る。

事実、「マンスフィールド高校事件」を、市民・公民権獲得闘争を展開した黒人側の視点に立って取り扱った二次史料としての学術書が、アメリカに1冊のみ存在をするものの、1990年代の半ばに出版された同書の基となっているものは、西テキサス農工大学大学院へ提出された修士学位論文である。一方、高名なテキサス州史家であるランドルフ・B・キャンベル(Randolph B. Campbell)の手による、テキサス州史分野における代表的書籍(本文だけでも470頁に及ぶ)としての*Gone to Texas*においてさえも、マンスフィールドでの人種統合事件の叙述に、1頁強のスペースを割いているに過ぎず、またアメリカの諸大学における歴史学部の開講科目として設置されている、「アメリカ南部史」の如きタイトルが冠せられた講義科目で、しばしば教科書として用いられている*The American South*においては、このテキサス州での出来事を取り扱うにあたり、地名や高校名への言及を行うことなく、たったの2行にわたっての記述に終わっている。さらには、テキサス州内における黒人、並びにメキシコ系アメリカ人による公民権運動史を主題に据えた*Fighting Their Own Battles*では、「マンスフィールド高校事件」に関してわずか半頁しか割かれておらず、アメリカ南部黒人公民権運動通史の代表的著作としての*Eyes on the Prize*に至っては、同事件への言及が一切なされていない。¹⁾

そこで、本稿ではまず、テキサス州マンスフィールド市立図書館(Mansfield Public Library)、テキサス州立図書・公文書館(Texas State Library and Archives)、テキサス州議会図書館(Texas Legislative Reference Library)、そしてドワイト・D・アイゼンハワー大統領図書・公文書館(Dwight D. Eisenhower Presidential Library)を始めとする、テキサス州内外の公文書館等に収められている一次史料(テキサス州知事文書、テキサス州政府機

¹⁾ Robyn Duff Ladino, *Desegregating Texas Schools: Eisenhower, Shivers, and the Crisis at Mansfield High* (Austin: Univ. of Texas Press, 1996); Randolph B. Campbell, *Gone to Texas: A History of the Lone Star State*, 3rd ed. (New York: Oxford Univ. Press, 2017), 426–27; William J. Cooper Jr., Thomas E. Terrill, and Christopher Childers, vol. 2 of *The American South: A History*, 5th ed. (Lanham, Md.: Rowman and Littlefield, 2017), 794; Brian D. Behnken, *Fighting Their Own Battles: Mexican Americans, African Americans, and the Struggle for Civil Rights in Texas* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 2011), 39–40; Juan Williams, *Eyes on the Prize: America's Civil Rights Years, 1954–1965*, 30th-Anniversary ed. (New York: Penguin, 2013).

関文書、アイゼンハワー大統領文書、並びにオーラル・ヒストリーを含む)を援用しながら、このマンスフィールド高校を巡る人種統合事件の史的構築を試みていきたい。さらに、同事件に関する史実の掘り起こしを行う作業を通じて、テキサス州内黒人公民権運動史の「裏面史」にあたる、白人による抵抗運動——「マッシュ・レジスタンス」——の歴史に検証を加え、そのうえで、アメリカ南部公民権運動史ナラティブにおける「マンスフィールド高校事件」の位置付けを明らかにすることを、本稿執筆における目的とした。南部黒人公民権運動史において表出する、白人の手による「マッシュ・レジスタンス」は、しばしば、ミシシッピ州やアラバマ州をその代表格とする深南部(Deep South)諸州が露呈させた、あたかもこの地域に固有な「専有物」として語られてしまう。しかしながら、周辺南部(Peripheral South)州としてのテキサス州が1950年代中葉に示した、公教育分野における白人・黒人間人種分離制度死守への構えと、そのために講じられた手段こそが、後の1960年代半ばに至るまで深南部諸州を席捲することとなる、「マッシュ・レジスタンス」の在り方に、大きな影響を与えていったのである。

2. 史料から構築され得る「マンスフィールド高校事件」 ——黒人公民権運動と白人抵抗運動の交錯

地理区分上、周辺南部諸州の一つに数えられるテキサス州は、アメリカ南部地域の最も西端に位置し、西部諸州の一つであるニューメキシコ州と西側を接し、南部諸州の一つであるルイジアナ州と東側を接する、日本の総面積の約1.8倍に及ぶ広大な面積を有する州である。歴史的には、かつてスペインが領有権を主張し、その後はメキシコ領に編入されていたことに起因し、1845年にアメリカ合衆国の一州として編入された後のテキサス州西部においては、白人とヒスパニック系住民が人口の多くを占め、テキサス州東部との間の比較の問題として、黒人人口が密集するコミュニティは僅少であった。その一方、テキサス州東部においては、隣州のルイジアナ州へ、そしてさらにはその東方へと続いていく、「ブラック・ベルト」と称される肥沃な黒土地帯の存在の故、アメリカ南北戦争以前にあっては、綿花栽培を中心としたプランテーション経済とそれを支えた黒人奴隷制が発展、拡散しており、かつてのテキサス州東部は、前出のテキサス州史家キャンベルが自著のタイトルにも冠した如く、『黒人奴隷制の帝国』でもあった。この「ブラック・ベルト」の存在により、テキサス州東部に隣接するルイジアナ州、並びにそれ以東に位置するミシシッピ州、アラバマ州、ジョージア州、そしてサウスカロライナ州の計5州(深南部諸州)では、歴史的に州人口全体に占める黒人の割合が高く、それ故に20世紀の半ばを迎えても、白人住民による、黒人住民や黒人公民権運動に対する差別と偏見、そして憎悪の感情が強い地域でもあった。こうした地理的、歴史的条件により、テキサス州東部に位置する大多数のコミュニティにおいては、人種別人口構成上、黒人人口が集中していたばかりでなく、テキサス州政治の分野においても、プランターの血筋を継ぐ同州東部出身の政治家達が、多大な影響力を行使していた。また、アメリカ南北戦争に続いた南部再建期終了後は、深南部諸州における為政者達と同様に、テキサス州東部の白人エスタブリッシュメント層も、黒人からの投票権と市民権の剥奪を企てる一方、彼らは、自らの「白人の党」として

民主党に結集をし、爾来、1960年代の半ばに至るまで、テキサス州政界における民主党による事実上の一党支配体制が続くのである。²⁾

「マンスフィールド高校事件」の舞台となったテキサス州マンスフィールドは、近隣大都市の一つであるフォートワースから南東へ約15マイル(24キロ)の距離にあり、深南部諸州、並びにテキサス州東部を東西に横切る形で広がる、「ブラック・ベルト」の西端に位置している。従って、フォートワースや、マンスフィールドから北東へ30マイル強の距離にあるダラスといった、テキサス州にあっては比較的コスモポリタンの都市部が近くにありながらも、公職者を始めとし一般住民をも含んだマンスフィールドの白人市民は、白人・黒人間人種分離・隔離制度を柱に据えた「南部の伝統的生活様式」を堅守することに、常に鋭敏であった。1950年代の初頭、マンスフィールドで初等・中等公教育を受けるにあたっては、1年生から8年生までの白人生徒達は白人専用校へ、そして同じく1年生から8年生までの黒人生徒達は黒人専用校へ、それぞれ通学をしていた。20世紀中葉から遡ること半世紀前の1896年に、アメリカ連邦最高裁判所により示されていた、「プレッシー対ファーガソン判決」(*Plessy v. Ferguson*、以下「プレッシー判決」と記す)における法原則(「分離すれども平等」原則)から逸脱をしながら、テキサス州を含む南部諸州は、人種、肌の色による分離・隔離制度としての「ジム・クロウ」制度を合法化してきたのであったが、マンスフィールドの公教育制度においてもまさしく、実態としての「分離してかつ不平等」なる状況が存在していた。「分離」された白人校と黒人校との間には、教育水準と施設面においての明々白々なる「不平等」さが横たわっており、8年制の黒人専用校には教師がたった一人しかおらず、また同校においては水道や屋内トイレ施設が不在であったばかりでなく、給食プログラムや通学のためのスクール・バスも、黒人生徒達には一切提供されていなかった。初等・中等教育を終えたマンスフィールドの白人生徒達は、同市に唯一つだけある高校であり、かつ白人専用校である、マンスフィールド高校へ進学をする機会が与えられていたものの、同様に進学を望む黒人生徒達は、フォートワースにある黒人専用高校へ通わねばならず、生徒達は皆自費で、私営の中距離バスを利用して通学することを強いられていたのである。³⁾

1954年5月17日、アメリカ連邦最高裁判所が、半世紀前に「プレッシー判決」で示した自らの判断を覆し、公教育分野における人種分離教育制度を違憲とする「ブラウン対カンザス州トピーカ市教育委員会判決」(*Brown v. Board of Education of Topeka*、以下「ブラウン判決」と記す)を下すと、この判決を後盾として、マンスフィールドの黒人住民の間にも、自らに押し付けられてきた「分離してかつ不平等」なる現状を是正しようとする機

²⁾ Randolph B. Campbell, *An Empire for Slavery: The Peculiar Institution in Texas, 1821–1861* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1989); V. O. Key Jr., *Southern Politics in State and Nation* (New York: Knopf, 1949), 254, 259–60.

³⁾ John Howard Griffin and Theodore Freedman, *Mansfield, Texas: A Report of the Crisis Situation Resulting from Efforts to Desegregate the School System* (New York: Anti-Defamation League of B'nai B'rith, n.d. [1957]), 4, John Howard Griffin Research Information Binder, Mansfield Public Library, Mansfield, Tex.; Anna Victoria Wilson and William E. Segall, *Oh, Do I Remember!: Experiences of Teachers during the Desegregation of Austin's Schools, 1964–1971* (Albany: State Univ. of New York Press, 2001), 48.

運が高まる。「ブラウン判決」からちょうど3ヵ月が経過した8月17日、黒人公民権運動団体である「全国黒人地位向上協会」(National Association for the Advancement of Colored People)のマンズフィールド支部長を務めていたT・M・ムーディー(T. M. Moody)を中心とした、マンズフィールドの黒人指導者達が、同市教育委員会の母体にあたるマンズフィールド公立学区(Mansfield Independent School District)に対して請願書を提出し、この中においてムーディーらは、マンズフィールド高校を含めた同市の公立学校全てにおいて、人種統合教育への移行がなされるべき旨の申し立てを行った。しかしながら結果、この申し立てはマンズフィールド公立学区によって黙殺をされ、人種分離教育制度継続、維持の下で、9月の新学年度開始を迎えたのである。翌年に入り、「ブラウン判決」から1年余りが経過をした1955年5月31日、アメリカ連邦最高裁判所は、前年に自らが下した「ブラウン判決」のいわば施行判決版であるところの、「第2ブラウン判決」(*Brown II*)としばしば便宜的に称される判決を下す。この施行判決において同裁判所は、公立学校における白人・黒人間人種統合を推し進める主たる責任は、各地方自治体公立学区官吏や教育委員会が負うべきであるとし、同時に、連邦最高裁判所の下級裁判所であるところの連邦地区裁判所、並びに連邦控訴裁判所には、こうした地方教育行政官吏によって策定される人種統合策が、「ブラウン判決」の趣旨に沿ったものであるか否かの審理、判断をする責務が課せられることとなった。さらに、「第2ブラウン判決」の結びにおいてアメリカ連邦最高裁判所は、公教育分野における人種統合が、「可及的速やかに」行われるべきとの法廷意見を示したのであったが、まさにこの言葉を逆手に取るかのように、南部白人エスタブリッシュメント層は、「熟考したうえでの慎重な速度をもって、人種統合策を施行していけばよし」との自己都合的解釈をしていくこととなり、皮肉にもこの連邦最高裁判所による判決文の文言は、南部白人による、公立学校における人種統合教育への移行実現を完全阻止するための抵抗運動に、油を注ぐことになってしまう。施行判決としての「第2ブラウン判決」が、アメリカ連邦最高裁判所により下されるやいなや、1955年7月26日、再び「全国黒人地位向上協会」マンズフィールド支部長のムーディーらが牽引役となり、マンズフィールド高校を含む市内公立学校全てにおいて人種統合・共学が実現される旨を要望する、同市公立学区への申し立てがなされる。しかしながらこの折、9月に予定されていた新学年度開始までに、人種統合教育へ移行するための諸策を策定することは、物理的に困難であるとの表向きの理由により、マンズフィールド公立学区は、ムーディーらの主張を退け、少なくとも当面の1955学年度期間(1955年9月から翌年8月まで)においては、人種統合教育への移行は実現し得ないとの判断を示した。⁴⁾

マンズフィールド公立学区が、公教育分野における人種統合への抵抗姿勢を顕在化させる一方、同市における出来事に触発される形で、テキサス州都オースチンにおいても、州レベル政治家によるアメリカ連邦最高裁判所判決に対する抵抗運動が、次第に鮮明化、具体化していくこととなり、その抵抗運動の先導者となったのが、第37代テキサス州知事を務めていたR・アラン・シヴァース(R. Allan Shivers)であった。白人・黒人間人種関係を巡る事象、争点において保守的な——換言すれば、人種差別主義的な——色合いの強

⁴⁾ Ladino, *Desegregating Texas Schools*, 6, 8, 75–76; Griffin and Freedman, *Mansfield, Texas*, 5.

い、テキサス州東部に位置するラフキンで1907年に生まれたシヴァースは、テキサス大学オースチン校卒業と同時に弁護士資格を取り、1934年に27歳の若さでテキサス州議会の上院議員職に当選する。テキサス州史上、最年少の州上院議員として議会での経験を積んだ後の1947年に、テキサス州副知事職へと昇り詰めたシヴァースは、当時の州知事ビューフォード・H・ジェスター (Beauford H. Jester) の突然の病死を受け、1949年7月に知事職に就任する。その後、1950年、1952年、そして1954年に行われた州知事選挙を勝ち抜き、シヴァースはテキサス州政治上初めて、州知事職への3回連続当選を果たした。⁵⁾ シヴァースがテキサス州副知事職にあった折、第二次世界大戦後のアメリカ全国政治の領域においては、第33代民主党大統領ハリー・S・トルーマン (Harry S. Truman) 主導の下で、黒人公民権推進政策が進行していくのであるが、この動きに反発をした南部民主党勢力が、1948年大統領選挙にあたり、「州権民主党」(States' Rights Democratic Party) を結成するに至る。この南部民主党勢力による全国民主党組織への反乱に際し、いわば「州権擁護人種分離主義者」(states' rights segregationist) として、テキサス州政界において頭角を現すこととなったのが、シヴァースであった。⁶⁾ かつて、「このテキサス州は、私の手中に収まっているのだ」と豪語したとされるシヴァース州知事は、テキサス州民主党组织 (その中でも特に、民主党保守派グループ) の重鎮でありながら、その一方において、いわゆる「党派ライン」を超える形で、トルーマンの跡を継いだ第34代共和党大統領ドワイト・D・アイゼンハワー (Dwight D. Eisenhower) と、親しき関係にあった。⁷⁾ この「党派ライン」をまたがったの政治的、さらには個人的親交の始まりは、1952年の大統領選挙においてシヴァースが、共和党候補であるアイゼンハワーへの支持を表明し、「アイ・ライク・アイク」(“I Like Ike”) との共和党選挙キャンペーン・スローガンに呼応する、「アイゼンハワーを支持するテキサス民主党員」(“Texas Democrats for Eisenhower”) と称された政治・選挙運動を率いたことに求められる。⁸⁾ 政治的信条を始めとする諸点において、シヴァース州知事とアイゼンハワー大統領との間には、共通点が介在していたのであるが、公教育分野における人種統合の是非を巡る事案に関し、そもそもアイゼンハワーは、テキサス州知事と同様、連邦制の下、そしてアメリカ合衆国憲法の下において、各州が元来固有に持つべきとされてきた諸権限——つまりは、公教育制度を管理、運営する権限を含めたところの「州権」——の擁護者であったと同時に、自らが行政府長を務める国家

⁵⁾ “The Late Gov. Shivers Will Live On for Many,” *Alcalde* [bimonthly magazine published by the Ex-Students' Association of the University of Texas at Austin], Mar./Apr. 1985, 65; Lawrence Wright, “The Tide Turns,” *Texas Monthly*, Jan. 1986, 263.

⁶⁾ John Kyle Day, *The Southern Manifesto: Massive Resistance and the Fight to Preserve Segregation* (Jackson: Univ. Press of Mississippi, 2014), 117.

⁷⁾ Chandler Davidson, *Race and Class in Texas Politics* (Princeton, N.J.: Princeton Univ. Press, 1990), 180; Allan Shivers, “Interview with Allan Shivers,” interview by Fred Gantt, Dec. 18, 1967, OH 0026, transcript, 16, 22, Oral History Collection, Special Collections, North Texas State University [presently the University of North Texas], Denton, Tex.

⁸⁾ Sean P. Cunningham, *Cowboy Conservatism: Texas and the Rise of the Modern Right* (Lexington: Univ. Press of Kentucky, 2010), 30.

の最高裁判所が下した「ブラウン判決」の至当さと実効性に、疑念を呈していた人物でもあった。⁹⁾

「全国黒人地位向上協会」マンスフィールド支部長のムーディーらによる、同市公立学区に対しての、人種統合移行にかかわる2度目の申し立てが行われた日の翌日にあたる1955年7月27日、シヴァース州知事の旗振りにより、州政府機関としての「公立学校における人種分離制度に関するテキサス州知事諮問委員会」(Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools)が組織される。¹⁰⁾ テキサス州議会議員や州内教育関係者等をその構成メンバーとするこの諮問委員会を設立することにより、シヴァースは、アメリカ連邦最高裁判所による「強圧的な人種統合」を食い止めるための、テキサス州政府としての施策を策定すると共に、州内の地方公立学区や教育委員会が人種統合・共学への移行を迫られた際の、州政府としての対応方を検討し始めるのである。¹¹⁾ 「公立学校における人種分離制度に関するテキサス州知事諮問委員会」の如き、「ブラウン判決」に対するいわば「公的抵抗機関」をテキサス州政府部内に設立すべきとする考えは、同諮問委員会が組織される3ヵ月前にあたる1955年4月に、テキサス州司法長官ジョン・ベン・シェパード(John Ben Shepperd)によりなされた提案に、元来は基づいたものであった。シヴァース州知事の政治的盟友であり、州知事と同様、テキサス州東部の「ブラック・ベルト」地帯の出身でもあったシェパード州司法長官は、当初、15名の州議会議員をその構成メンバーとする、テキサス州議会内暫定委員会の設立を構想していたのであった。¹²⁾ しかしながら最終的に、州議会における委員会組織ではなく、州知事の掌理による委員会を立ち上げる運びとなり、結果この諮問委員会は、総計で42名の構成メンバーを有する一大組織となった。これら42名の構成メンバーの内、34名(教育関係者、法曹家等民間人)がシヴァース州知事による任命を、3名(州上院議員)がベン・ラムジー(Ben Ramsey)州副知事による任命を、そして5名(州下院議員)がジム・T・リンジー(Jim T. Lindsey)州下院議長によ

⁹⁾ Stephen E. Ambrose, *Eisenhower: The President* (New York: Simon and Schuster, 1984), 190.

¹⁰⁾ Office of the Governor, press memorandum, July 27, 1955, folder: "Segregation—Miscellaneous," box 1977/081-464, Records of Texas Governor Allan Shivers, Archives and Information Services Division, Texas State Library and Archives, Austin, Tex.

¹¹⁾ Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools, "Report of the Legal and Legislative Subcommittee of the Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools," Sept. 1, 1956 [adopted by the subcommittee on Sept. 24, 1956], 3, 11, box 84, U.S. Senator Price Daniel Papers, Sam Houston Regional Library and Research Center, Texas State Library and Archives, Liberty, Tex.; U.S. Commission on Civil Rights, *Report of the United States Commission on Civil Rights, 1959* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1959), 235. なお、「公立学校における人種分離制度に関するテキサス州知事諮問委員会」が公表した"Report of the Legal and Legislative Subcommittee"は、テキサス州議会図書館(Texas Legislative Reference Library)、並びにテキサス大学オースチン校キャンパス内にあるドルフ・ブリスコー・アメリカ史研究センター(Dolph Briscoe Center for American History)においても、閲覧することが出来る。

¹²⁾ John Ben Shepperd to W. R. Chambers [Texas state representative], Western Union telegram, Apr. 13, 1955, folder: "Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools," box 1977/081-116, Records of Texas Governor Allan Shivers.

る任命を受けたのであった。¹³⁾ シヴァース州知事による被任命者の中には、5名の黒人市民（伝統的黒人大学の学長3名、黒人大学の校医1名、並びに葬祭業者1名）が含まれていたのではあったが、これら全ての黒人委員は、州知事の側近と個人的友人らにより慎重に選ばれ、推薦された、州内における人種分離制度の温存に異論を唱えないであろうと信じられていた人物達であり、諮問委員会が「バイ・レイシャル」な機関であることを同委員会内外に示すための、いわば名目的な構成メンバーであったことは否定出来ない。¹⁴⁾

シヴァース州知事主導の下、テキサス州政府機関として設置をされた「公立学校における人種分離制度に関するテキサス州知事諮問委員会」の初会合は、その設立が発表されたわずか5日後の1955年8月1日に、州都オースチンの州議会議事堂内上院議場において開催された。この初会合の場において、参集した40名を超える委員を「テキサス州が生んだ最良の賢者達」と呼び、称賛をしたシヴァース州知事は、アメリカ連邦最高裁判所が下した「ブラウン判決」を、「アメリカ史における最も不当で、かつ根拠薄弱な、州権侵害例の一つ」であると糾弾をしたうえで、諮問委員会のメンバーに対して、人種分離・隔離制度の下で築かれた南部の、そしてテキサス州の「伝統的生活様式」を守り抜くことへの尽力を要請したのである。¹⁵⁾ またこの折に、同諮問委員会の「活動の先鋒」としての役割を果たすべく、委員会内に「法制・立法小委員会」(Legal and Legislative Subcommittee) の設置が検討されることとなった。¹⁶⁾ 母体である諮問委員会の初会合から約2週間後の8月13日に、この小委員会は、5名のメンバー（内4名は法曹家）をその構成員として正式に発足した。¹⁷⁾ それから間もなくして、9月の新学年度開始を目前とする中、「法制・立法小委員会」

¹³⁾ “Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools” [one-page committee member list], n.d. [July 1955?], folder: “Governor’s Advisory Committee on Segregation,” box 1989/041–248, Records of the Texas Attorney General’s Office, Archives and Information Services, Texas State Library and Archives, Austin, Tex.; “Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools” [detailed two-page committee member list], n.d. [July 1955?], folder: “Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools,” box 1977/081–116, Records of Texas Governor Allan Shivers.

¹⁴⁾ Untitled list of the recommended potential members for the Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools, n.d. [July 1955?], folder: “Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools,” box 1977/081–116, Records of Texas Governor Allan Shivers; Ricky F. Dobbs, *Yellow Dogs and Republicans: Allan Shivers and Texas Two-Party Politics* (College Station: Texas A&M Univ. Press, 2005), 41, 109–110, 127, 173.

¹⁵⁾ Allan Shivers, “Statement to [the] Advisory Committee on Segregation in the Public Schools,” n.d. [Aug. 1, 1955], 1, 4–5, folder: “Governor’s Advisory Committee on Segregation,” box 1989/041–248, Records of the Texas Attorney General’s Office.

¹⁶⁾ Will Crew Morris [chair, Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools] to Earnest E. Sanders [chair-to-be, Legal and Legislative Subcommittee of the Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools], n.d. [Aug. 1955], folder: “Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools,” box 1977/081–116, Records of Texas Governor Allan Shivers.

¹⁷⁾ Texas Advisory Committee on Segregation [in the Public Schools], press memorandum, Aug. 13, 1955, folder: “Segregation—Miscellaneous,” box 1977/081–464; Will Crew Morris to M. K. Curry Jr. [president, Bishop College, Marshall, Tex.], Aug. 19, 1955, 1, folder: “Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools,” box 1977/081–116, both in Records of Texas Governor Allan Shivers.

による中間報告書が公にされ、同報告書において、人種統合への「公的抵抗機関」としての州知事諮問委員会は、市内地方公立学区・教育委員会に対し、公教育分野における人種共学への移行を、まさに「慎重な速度」——施行判決としての「第2ブラウン判決」で用いられた表現——で行うように指示をしたばかりでなく、1955学年度において人種統合への移行へ踏み切った公立学区に対しては、州政府から支出される教育補助金の減額や支給停止があり得ることをも示唆したのである。¹⁸⁾

こうして今や、地方政府としてのマンスフィールドによる不作為のみならず、州知事に率いられたテキサス州政府による、同政府を挙げての公立学校における人種統合への抵抗姿勢を事解するに至り、「全国黒人地位向上協会」マンスフィールド支部は、ついに法的手段に訴える覚悟を固める。フォートワースの黒人弁護士であったL・クリフォード・デーヴィス (L. Clifford Davis) の助力の下、1955年10月7日、マンスフィールドに居住する計12名の黒人高校生を代表する形で、この内の3名の生徒達の保護者が原告となり、テキサス州北部を管轄するアメリカ連邦地区裁判所 (U.S. District Court for the Northern District of Texas) への提訴がなされた。これをもって、その後約11ヵ月間に及ぶ、マンスフィールド高校における人種統合実現を求める法廷闘争が、幕を開けることとなる。この裁判は、テキサス州東部に位置するコマース出身の、ジョセフ・E・エステス (Joseph “Joe” E. Estes) 判事により審理されることとなり、原告・被告双方による口頭弁論が、提訴からちょうど1ヵ月後にあたる、11月7日に開始されることが決定された。連邦地区裁判所での口頭弁論開始を控えた10月25日の夜半には、裁判の行方を注視している120名を超えるマンスフィールドの白人市民が、同市の集会所に集まり、判決内容の如何にかかわらず、マンスフィールド高校における人種統合を全面拒否していく旨を決意した、決起集会の開催を見るのである。¹⁹⁾

連邦判事でありながらも、自らが生まれ育ったテキサス州東部「ブラック・ベルト」地帯の因習である「ジム・クロー」制度の呪縛から、完全に解放されることのなかったエステス判事は、1955年11月21日に判決を下し、そこにおいて、マンスフィールド公立学区・教育委員会は、人種統合移行へ向けての「誠意ある努めをしている」旨の認定をし、さらには学年度の途中における統合策施行には難があることを理由として、原告側の訴えを退けてしまう。この判決を不服とした原告側弁護人のデーヴィスは、翌1956年の初春に、ルイジアナ州ニューオーリンズに法廷を構える、アメリカ連邦第5控訴裁判所 (U.S. Fifth Circuit Court of Appeals) へ控訴をし、マンスフィールドにおける人種統合事件を巡る訴訟案件は、テキサス州ヒューストンの出身で、かつて同市長の職にあり、控訴裁判所

¹⁸⁾ “Appendix 1: Preliminary Report of the Legal and Legislative Subcommittee, Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools, Austin, Texas, August 18, 1955,” in Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools, “Report of the Legal and Legislative Subcommittee of the Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools,” n.p. [p. 36]; “. . . [illegible] to Go Slow by Legal Subcommittee,” *Fort Worth (Tex.) Star-Telegram*, Aug. 21, 1955 [?], envelope: “Segregation, Texas,” *Fort Worth Star-Telegram* Newspaper Clippings Collection, Special Collections and Archives, University of Texas at Arlington, Arlington, Tex.

¹⁹⁾ Griffin and Freedman, *Mansfield, Texas*, 5; *Mansfield (Tex.) News*, Oct. 27, 1955.

においては首席判事の要職にもあった、ジョセフ・C・ハッチソン・ジュニア (Joseph C. Hutcheson Jr.) 判事の手に委ねられることとなった。1956年9月からの新学年度開始まで約2ヵ月と迫った6月28日、アメリカ連邦第5控訴裁判所は、下級裁判所の判断を覆し、マンスフィールド高校を巡る訴訟案件を、連邦地区裁判所のエステス判事へと差し戻した。法廷意見を綴ったハッチソン首席判事は、下級裁判所の判断は「ブラウン判決」の趣旨の下で守られているはずの原告の権利を奪うものであり、かつ「実質的な中身を伴わない[誠意は]、十分なものであるとは言い難い」とし、マンスフィールド公立学区・教育委員会を戒めたのである。その後、この差し戻し判決を受けたアメリカ連邦地区裁判所のエステス判事は、いわば選択の余地なく、上級裁判所の判断に沿った新たな判決文を記し始める。連邦控訴裁判所判決が出されてからちょうど2ヵ月が経過した——そして1956学年度の入学・科目登録開始日をわずか3日後に控えた——8月27日、エステス判事は、被告であるマンスフィールド公立学区・教育委員会に対して、人種・肌の色を理由とし、入学資格のある生徒達によるマンスフィールド高校への入学を、拒絶してはならない旨の裁判所命令を下した。²⁰⁾

しかしながら、連邦司法府が下したこうした判断は、マンスフィールドの白人市民の多くにとっては、受け入れ難き「司法による専制」(アメリカ南部白人が繰り広げた「マッシュ・レジスタンス」の一大扇動者であった、ミシシッピ州選出連邦上院議員ジェームズ・O・イストランド [James O. Eastland] が、1955年の末にこう糾弾した如く) 以外の何物でもなかった。²¹⁾ 新学年度の入学・科目登録日の初日にあたる1956年8月30日、250名を超える(400名近くとの報道もなされている) 半暴徒化したマンスフィールドの白人住民と、事態を聞きつけた近郊のアーリントンからの白人達が、黒人生徒達による入学を阻止するために、マンスフィールド高校を取り囲んだ。²²⁾ 高校の敷地内に駐車された乗用車には、あたかもメッセージ・ボード代わりのように、黒人に対する警告や侮蔑の言葉がペイントされたばかりでなく、前日の深夜からこの日の未明にかけて、白人住民の何者かによって、普段は星条旗がなびく国旗掲揚ポールの頂上に、木の枝から首を吊るされた黒

²⁰⁾ J. W. Peltason, *Fifty-Eight Lonely Men: Southern Federal Judges and School Desegregation* (New York: Harcourt, Brace, and World, 1961; reprint, Urbana: Univ. of Illinois Press, 1971), 110–11; *Fort Worth Star-Telegram*, Aug. 28, 1956.

²¹⁾ James O. Eastland, “We’ve Reached Era of Judicial Tyranny”: *An Address by Senator James O. Eastland of Mississippi before the Statewide Convention of the Association of Citizens’ Councils of Mississippi Held in Jackson, December 1, 1955* (Winona, Miss.: Association of Citizens’ Councils of Mississippi, n.d. [1956?]), 15, folder 12, box 124, Paul B. Johnson Family Papers, Archives and Manuscript Department, William D. McCain Library and Archives, University of Southern Mississippi, Hattiesburg, Miss.

²²⁾ Webb B. Joiner [Arlington, Tex., resident] to Allan Shivers, Sept. 3, 1956, folder: “Segregation—Mansfield, 1956,” box 1977/081–532, Records of Texas Governor Allan Shivers; Griffin and Freedman, *Mansfield, Texas*, 6; Mansfield Historical Society, *The History of Mansfield, Texas: Mid 1800–1965* (Dallas, Tex.: Curtis Media, 1996), 88, Research Room, Mansfield Historical Museum and Heritage Center, Mansfield, Tex.; L. Clifford Davis, “Oral History with L. Clifford Davis,” filmed interview by Todd Moye, June 11, 2015, Civil Rights in Black and Brown Oral History Project, Mary Coats Burnett Library, Texas Christian University, Fort Worth, Tex.

人を彷彿とさせるような(かつて南部で多発した、白人による黒人に対するリンチ事件を思わせるような)、藁が中に詰められた等身大の人形 (effigy) が吊るされていた。この黒人に似せた藁人形を、国旗掲揚ポールから撤去するか否かを記者から尋ねられた学校長のウィリー・ピッグ (Willie Pigg) は、「私が、[星条旗の代わりに] あの人形を吊るしたわけではないのだから、別に降ろすことは考えていない」との冷然たる返答をしている。²³⁾ アメリカ連邦地区裁判所の命令を直接の後盾とし、マンスフィールド高校への入学が認められていたはずの黒人生徒達ではあったが、彼らの内誰一人として入学登録に訪れる者はなかった。まさにこの日、テキサス州のマンスフィールド高校においては、「自由と統合」を体現するはずの星条旗が、「抑圧と分離」の象徴物としての藁人形によって取って代わられたのである。

翌日、1956年8月31日の金曜日は、マンスフィールド高校における新学年度の入学・科目登録日の2日目、そして最終日であった。前日に集まっていた群衆の数を上回る数の白人住民 (300人から400人との報道や、500人との報道も確認される) が、再びマンスフィールド高校を取り囲む物々しさの中、登録のために訪れた白人生徒達が、高校の正面玄関から校舎内へ入っていくのであるが、その正面玄関上方には、黒人を模した2体目の等身大藁人形が、首にあたる部分から吊るされていた。校庭内の国旗掲揚ポールには、1体目の藁人形が、取り外されることなく吊るされたままとなっていた。連邦地区裁判所命令により、同校へ入学する権利が認められていた黒人生徒達の身の安全を案じた、フォートワースの黒人弁護士デーヴィスは、マンスフィールド教育長であったR・L・ハフマン (R. L. Huffman) 宛の電報を介し、これら生徒達の入学登録を試みるものの、この要求はハフマンによってはねつけられる。²⁴⁾ 翻って、テキサス州都が置かれているオースチンにおいても、州知事シヴァースによる、マンスフィールド高校における人種統合への、ひいては連邦司法府への徹底抗戦が続いていた。8月31日、報道機関に向けた計2通にわたるプレスリリースの中において、「全国黒人地位向上協会」による「時期尚早で愚かな」行動を批判したシヴァースは、アメリカ連邦制の下で、テキサス州が元来固有に持つべきとされてきた権限であるところの「州権」を引き合いに出しながら、アメリカ合衆国憲法理論としての、「インターポジション」(interposition) と称される理論 (連邦政府と自州民との間に州の権限を「差しはさみ」、これにより、「マンスフィールド高校事件」の如き事案においては、連邦司法府による人種統合命令を効力なきものとする憲法理論) を展開した。²⁵⁾ こうして、「州権」の発動と、その権限を行使するにあたっての具体策である「インターポジション」の理論に依拠したシヴァース州知事は、テキサス州に固有な州警備・警官隊にあたる「テキサス・レンジャーズ」(Texas Rangers) の隊員2名を、白人住民による「秩序ある抗議行

²³⁾ *Dallas (Tex.) Morning News*, Aug. 31, 1956.

²⁴⁾ Mansfield Historical Society, *The History of Mansfield, Texas*, 88; Griffin and Freedman, *Mansfield, Texas*, 7.

²⁵⁾ Office of the Governor, press memorandum [the first press memorandum of the day], Aug. 31, 1956, folder: “[Press Memorandum, Office of the Governor,] August 1956,” box 1977/081–532, Records of Texas Governor Allan Shivers.

動」(シヴァース自身による表現)が続いているマンスフィールド高校へ、法執行官として派遣することを公にすると共に、「暴力事件を誘発する」可能性のある人物——つまりは、マンスフィールド高校への入学を望んでいる黒人生徒達——の入学を許可せず、これら生徒達を再び、フォートワースにある黒人高校へ通学させるよう、マンスフィールド公立学区に対して通達、命令したのであった。2通目のプレスリリースの結びにおいてシヴァース州知事は、あたかも連邦政府、そして連邦最高裁判所を挑発するかの如く、「連邦政府にとって、私の対応方が気に入らないものであるとするのであれば、『ブラウン判決』を下した張本人である連邦最高裁判所が、マンスフィールド高校における人種統合を自ら執行すれば良いではないか」との論辯に及んだのである。²⁶⁾

火曜日にあたる1956年9月4日、新学年度の授業開始日を迎えた(前日の9月3日の月曜日が、国定祝日である「勤労者の日」[Labor Day]であったがため)マンスフィールド高校では、前週の木曜日と金曜日に引き続き、早朝より200名を超える白人住民が、再び校舎、校庭を取り囲んだ。授業への出席のため、白人生徒達が続々と校舎の中に入っていく一方、数日前の8月31日に布告されたテキサス州知事シヴァースの命令に従い、マンスフィールド公立学区は、マンスフィールド高校への入学を希望してきた黒人生徒達に、「テキサス・レンジャーズ」隊員の護衛を付けたうえで、彼らを従前通り、フォートワースにある黒人専用高校へと送り込んだのである。この日に至っても、マンスフィールド高校校庭内の国旗掲揚ポールと校舎正面玄関上方に吊るされた2体の等身大藁人形は、ついで撤去されることはなかった。²⁷⁾ 同日夜半、マンスフィールド高校における人種統合実現を求める法廷闘争に臨んできた、黒人原告側弁護士デーヴィスは、連邦行政府としてのアイゼンハワー大統領政権が、連邦司法府が下した人種統合判決を施行するうえでの、なんらかの手助けをしてくれることを念じながら、黒人生徒達によるマンスフィールド高校への入学を、一旦延期する旨の声明を発表した。²⁸⁾ しかしながら、その翌日、デーヴィスが心中に描いたこの淡い期待は、現実のものとはならなかった。

1956年9月5日、首都ワシントンのホワイトハウス内で持たれた定例記者会見の場において、「マンスフィールド高校事件」に関する記者からの質問に答えたアイゼンハワー大統領は、テキサス州で生じた人種統合・共学を巡る事案は、「同州の然るべき官権により既に取り扱われており、かつマンスフィールドの治安・秩序が回復されている」事実に鑑み、今や連邦政府にとっての「重要な案件ではあらず」、アイゼンハワー政権としては、テキサス州の問題に介入をする考えのないことを明らかにした。²⁹⁾ 上述した如く、そも

²⁶⁾ Office of the Governor, press memorandum [the second press memorandum of the day], Aug. 31, 1956, folder: “[Press Memorandum, Office of the Governor,] August 1956,” box 1977/081-532, Records of Texas Governor Allan Shivers.

²⁷⁾ Griffin and Freedman, *Mansfield, Texas*, 8; Mansfield Historical Society, *The History of Mansfield, Texas*, 88.

²⁸⁾ *Austin (Tex.) Statesman*, Sept. 5, 1956; *Brownsville (Tex.) Herald*, Sept. 5, 1956.

²⁹⁾ Dwight D. Eisenhower, “The President’s News Conference of September 5, 1956,” in *Public Papers of the Presidents of the United States: Dwight D. Eisenhower, 1956* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1958), 735, 741.

そもアイゼンハワー大統領は、アメリカ連邦最高裁判所が1954年に下した「ブラウン判決」の内容とその実効性に疑問を抱く懐疑論者であったばかりでなく、テキサス州知事シヴァースが信奉する政治的信条でもある、アメリカ連邦制の下での「州権」の擁護者でもあった。³⁰⁾ さらに現実的には、そして実利的には、アイゼンハワーには、1952年のアメリカ大統領選挙において自身への支持を表明してくれたシヴァースに対する、いわば「政治的借り」があったと共に、大統領職への再選を狙っていたアイゼンハワーにとっては（「マンスフィールド高校事件」が生じた1956年は、再び大統領選挙の年でもあった）、テキサス州における票固めのために、再びシヴァースによる政治的支援が必要とされたのである。³¹⁾ ワシントンでの大統領による記者会見の内容に接したデーヴィス弁護士は、今やアイゼンハワー政権による人種統合事案への積極的介入が望めないことを悟り、9月5日の夜半、黒人生徒達によるマンスフィールド高校への入学を断念するに至る。³²⁾ 一方、マンスフィールド高校における、人種統合・共学への移行を阻止することに奏功したシヴァース州知事は、アイゼンハワー大統領による記者会見が行われた翌日にあたる9月6日、テキサス州都オースチンにおいて自身の記者会見を開き、その場において同知事は、「全国黒人地位向上協会」マンスフィールド支部長のムーディーや、同協会のために尽力してきたデーヴィス弁護士らを、「金銭的報酬を得るための扇動者達」であると指弾し、「こうした扇動者達がいなければ、[マンスフィールドでの]騒動は起こらなかったはずだ」との高唱に及んだ。³³⁾ シヴァースがオースチンで記者会見に臨んだその日の朝、高校での人種統合事件の顛末を報じたマンスフィールドの新聞『マンスフィールド・ニュース』は、

³⁰⁾ 黒人市民・公民権全般、そして特に「ブラウン判決」に関してのアイゼンハワー大統領の個人的心情については、同大統領図書・公文書館に収められている以下に記す一次史料が参考になる。とりわけ、「マンスフィールド高校事件」の直前にあたる1956年8月半ばに、アイゼンハワーの私設秘書により綴られた日記と電話通話記録には、大統領と同秘書との間で交わされた「ブラウン判決」を巡る会話の内容が収められており、そこにおいてアイゼンハワーは、「幾世代にもわたって南部白人の中に植え付けられてきた、生まれ持った人種観」を、同判決が一夜にして払拭するはずはなく、かえって「ブラウン判決」は、「南部黑人による社会的進歩の速度を後退させてしまう」結果を招くことになるであろうとの言及をしている。Dwight D. Eisenhower, diary entry, July 24, 1953, folder: "Diary—Copies of Dwight D. Eisenhower Personal, 1953–54 (2)," box 9, Dwight D. Eisenhower Diary Series; Ann C. Whitman [Eisenhower's personal secretary at the White House], "Diary [Entry]," Aug. 14, 1956, folder: "August 1956 Diary (1)," box 8, Ann C. Whitman Diary Series; Whitman, "Telephone Calls," memo, Aug. 19, 1956, folder: "August 1956 Diary (1)," box 8, Ann C. Whitman Diary Series, all in Papers of Dwight D. Eisenhower as President, Dwight D. Eisenhower Presidential Library, Abilene, Kans.

³¹⁾ Herbert Brownell and John P. Burke, *Advising Ike: The Memoirs of Attorney General Herbert Brownell* (Lawrence: Univ. Press of Kansas, 1993), 196; David A. Nichols, *A Matter of Justice: Eisenhower and the Beginning of the Civil Rights Revolution* (New York: Simon and Schuster, 2007), 136.

³²⁾ Ladino, *Desegregating Texas Schools*, 114; Ramona Houston, "The NAACP State Conference in Texas: Intermediary and Catalyst for Change, 1937–1957," *Journal of African American History* 94 (Fall 2009): 521.

³³⁾ *Dallas Morning News*, Sept. 7, 1956; *Fort Worth Star-Telegram*, Sept. 7, 1956; Amilcar Shabazz, *Advancing Democracy: African Americans and the Struggle for Access and Equality in Higher Education in Texas* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 2004), 269; Martin Herman Kuhlman, "The Civil Rights Movement in Texas: Desegregation of Public Accommodations, 1950–1964," Ph.D. diss., Texas Tech University, 1994, 118–19.

「高校を取り囲んだ[勇氣ある]人々の壁が、墮落したよそ者分子達から、[我々の]高校を守った」と記し、人種統合への徹底抗戦の構えをみせ、そしてそれに成功を収めた白人住民達を称賛したのであった。³⁴⁾

テキサス州知事シヴァースによる記者会見からちょうど1週間後の1956年9月13日、同州知事が「金銭的報酬を得るための扇動者達」と呼び、『マンズフィールド・ニュース』紙が「墮落したよそ者分子達」と称した黒人公民権運動・活動家をその会員とする、「全国黒人地位向上協会」の州内組織が、テキサス州政府による法的攻撃の対象とされ始める。「マンズフィールド高校事件」と同様な事件が、拡散していく可能性を根絶することを目指し、シヴァース州知事政権下において、「ジム・クロウ」制度温存のための諸策立案を支えてきた州司法長官シェパードが、州内における「全国黒人地位向上協会」の活動が禁止、もしくは制限されることを求めて、州東部タイラーに法廷を置くテキサス州第7地区裁判所(7th District Court of Texas)に訴えを起こしたのである。「マンズフィールド高校事件」の直後に、「全国黒人地位向上協会」を、「ペテン仕事に忙しい、[白]人をいらつかせる」団体と苦々しく呼んでいたシェパードにより提訴されたこの裁判事案は、後に、1957年1月にシヴァースの後を継いだ、第38代テキサス州知事M・プライス・ダニエル・シニア(M. Price Daniel Sr.)政権下での新州司法長官、ウィル・R・ウィルソン・シニア(Will R. Wilson Sr.)に引き継がれ、同年5月、審理にあたってきたテキサス州地区裁判所は、「全国黒人地位向上協会」が州内において、公教育分野における人種統合・共学を求める法廷闘争に関与することを禁じ、この裁判所命令はその後、1960年代を迎えてもその効力を持ち続けたままとなった。³⁵⁾ こうしたテキサス州行政府主導による、「全国黒人地位向上協会」への嫌がらせの如き法的攻撃に歩調を合わせる形で、「マンズフィールド高校事件」発生の翌年に開催された1957年テキサス州議会においても、「ブラウン判決」の趣旨を骨抜きにすることを狙った、計12法案にも及ぶいわゆる「人種分離諸法案」が、テキサス州東部「ブラック・ベルト」地帯選出の議員達から提出される。(これら諸法案の具体的内容を練ったのは、1955年夏にシヴァース州知事により設立された、「公立学校における人種分離制度に関するテキサス州知事諮問委員会」であった。) 州議会に提出された「人種分離諸法案」の内、当該公立学区に居住する有権者の過半数を超える人々が認めない限り、その学区における人種統合・共学教育を禁じることを謳った法案が、上下両院において採択される。³⁶⁾ 議会会期の最終日にあたる1957年5月23日、ダニエル新州知事はこの法案に署名をし、新学年度の開始を目前に控えた8月22日に、同法の州内施行

³⁴⁾ *Mansfield News*, Sept. 6, 1956.

³⁵⁾ Office of the Attorney General, press release, Sept. 6, 1956, folder: "Segregation—Mansfield, 1956," box 1977/081-532, Records of Texas Governor Allan Shivers; "Legal Action," *Southern School News* [publication of the Southern Education Reporting Service, Nashville, Tenn.], June 1957, 2, *Southern School News* Collection, Tennessee State Library and Archives, Nashville, Tenn.

³⁶⁾ Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools, "Report of the Legal and Legislative Subcommittee of the Texas Advisory Committee on Segregation in the Public Schools," 26-33; Charles Waite, "Price Daniel, Texas Democrats, and School Segregation, 1956-1957," *East Texas Historical Journal* 48 (Fall 2010): 116-17.

が開始されたのであった。³⁷⁾

3. アメリカ南部黒人公民法運動史ナラティブにおける 「マンスフィールド高校事件」の位置付け

アメリカ連邦最高裁判所による「ブラウン判決」から、実に10年の歳月を経た1964新学年度の開始時においても、テキサス州内に居住する小学生から高校生までの約325,000名の黒人生徒達の内、わずか5.5パーセントに相当する約18,000名の生徒のみが、人種統合・共学への移行を果たした公立学校に通学をしていたに過ぎなかった。³⁸⁾ この同じ年の夏に、テキサス州出身である第36代民主党大統領リンドン・B・ジョンソン (Lyndon B. Johnson) の主導の下——そして、今や朽ちかけた「ジム・クロー」制度にしがみつき続ける、南部諸州選出の連邦議員達による反対と抵抗の中——連邦法としての「1964年公民権法」(Civil Rights Act of 1964) が成立を見るのであるが、人種統合への移行を拒み続けている公立学区に対する、連邦資金援助の停止を規定した同法の第6章の存在により、人種統合事件から9年の年月が経過しようとしていたマンスフィールド高校も、1965年8月31日、8名の黒人生徒達を受け入れることにより、ついに人種統合・共学への移行を果たすのである。(初等・中等教育課程を含めたマンスフィールド公立学区全体としては、総計で30名の黒人生徒達が、伝統的白人校への通学を始めた。)³⁹⁾ このように、出来事の上澄み部分だけを、つまりは単に事の結果だけを眺めてしまえば、1956年の晩夏にテキサス州で生じた「マンスフィールド高校事件」は、アメリカ南部黒人公民法運動史における「善玉」が、「悪玉」との闘いにおいて、最終的には敗北を甘受してしまった人種統合事件として(換言すれば、多くの人々の目に「ヒーロー」や「ヒロイン」として映り称揚される者達を生み出すことのなかった、公民権運動における単なる「ある一つの出来事」として)、理解されてしまうことであろう。それがために、連邦司法府の後ろ盾を得ながらも、地方政府としてのマンスフィールドとその白人住民による抵抗と憎悪、人種分離・隔離制度を核とした南

³⁷⁾ Price Daniel, statement, May 23, 1957, folder: “Segregation,” box 369, Governor Price Daniel Records, Sam Houston Regional Library and Research Center, Texas State Library and Archives, Liberty, Tex.; *Dallas Morning News*, May 24, 1957; “Texas Legislators Pass Pupil Assignment Law,” *Southern School News*, June 1957, 2, *Southern School News* Collection; U.S. Commission on Civil Rights, *Report of the United States Commission on Civil Rights, 1959*, 204, 239.

³⁸⁾ “Texas: Pace Increases in Last Part of Decade,” *Southern School News*, May 17, 1964, 14, *Southern School News* Collection; U.S. Commission on Civil Rights, *1964 Staff Report: Public Education* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1964), 219, 291; Campbell, *Gone to Texas*, 427; James McEnteer, *Deep in the Heart: The Texas Tendency in American Politics* (Westport, Conn.: Praeger, 2004), 84.

³⁹⁾ The author’s memo taken at a panel discussion entitled “Integrating Mansfield Schools: First Person Voices,” cohosted by the University Libraries, the Center for African American Studies, and the Center for Greater Southwestern Studies of the University of Texas at Arlington, Feb. 26, 2019, Central Library, University of Texas at Arlington, Arlington, Tex.; Angelica Perez, “Discussion Panel Features First-Person Accounts of the Integration of Mansfield Schools,” *Shorthorn* [campus newspaper at the University of Texas at Arlington], Feb. 27, 2019; *Dallas Morning News*, Aug. 30, 2018; Ladino, *Desegregating Texas Schools*, 142.

部の、そしてテキサス州の「生活様式」を死守しようとするテキサス州政府による徹底抗戦の構え、さらには連邦行政府としてのアイゼンハワー大統領政権による黙殺・黙認という、いわば「階層的な三重苦」に抗することが出来なかったことを示したこの事件は、アメリカ南部黒人公民権運動史ナラティブにおける「本文」ではなく、「脚注」の中に埋もれてしまうこととなったのである。

しかしながら、実にこの「マンスフィールド高校事件」が、テキサス州黒人公民権運動史、並びに南部黒人公民権運動史の双方の文脈において、重要な位置を占めた事件であったことは、看過されてはならない。1954年に「ブラウン判決」が、そしてその翌年にあたる1955年にこの判決の施行判決がアメリカ連邦最高裁判所により下された後、マンスフィールド公立学区は、連邦司法府による公教育分野における人種統合命令を、テキサス州内において受けた初の学区であり、1956年に生じた「マンスフィールド高校事件」を端緒として、1957新学年度においてはテキサス州内の120に及ぶ公立学区で（もっともこうした学区は、元来黒人生徒達が不在か、もしくは僅少であるテキサス州西部に位置する学区ではあったものの）、人種統合・共学への移行が進められたのである。⁴⁰⁾ 他方、1950年代後半から1960年代前半にかけての黒人公民権運動の時代を通じ、人種統合への移行を命じる連邦司法府に反旗を翻したテキサス州政府が、治安・秩序回復の名目の下に「州権」を発動（具体的には、「テキサス・レンジャーズ」隊員の派遣であったが）する対象とした、州内における唯一のコミュニティーともなったのが、他でもないマンスフィールドであった。

「マンスフィールド高校事件」に際しての、テキサス州知事シヴァースによるこの「州権」の援用は、同事件の後、公教育分野における人種統合反対を唱える他の南部諸州の知事らによって、連邦司法府に（そして後には連邦行政府にも）対抗するための手段として用いられていくこととなる。「マンスフィールド高校事件」から1年を経た1957年9月、アーカンソー州都リトルロックにおいて、伝統的白人校であったセントラル高校が人種統合・共学事件の舞台となり、テレビ放送が急速な普及をする中、マスメディアを介し、この「リトルロック・セントラル高校事件」が全米の注目の的とされた。アメリカ南部黒人公民権運動史ナラティブにおいて、必ず言及をされるこの人種統合事件においては、連邦裁判所命令の後ろ盾を得た9名の黒人生徒達が、同高校への入学を試みるのであるが、それに際し、憤怒をし、見境をなくした州都の白人住民が暴徒化する。前年に生じた「マンスフィールド高校事件」に際して、アイゼンハワー大統領が同事件への不介入の態度を貫いたことを看取していた、時のアーカンソー州知事オーヴァル・E・フォーバス (Orval E. Faubus) は、暴動鎮圧の名目の下、そして実体としては黒人生徒達の入学を阻止するために、アーカンソー州軍を州都に派遣し、これによりリトルロックはあたかも、戒厳令下に置かれた都市の如き様相を呈したのである。⁴¹⁾ この期に及んで、大統領としての2期目を迎えていたアイゼンハワーは、白人暴徒達の蛮行をアメリカにとっての「恥ずべき出来事」と呼び、不

⁴⁰⁾ Alwyn Barr, *Black Texans: A History of African Americans in Texas, 1528–1995*, 2nd ed. (Norman: Univ. of Oklahoma Press, 1996), 208.

⁴¹⁾ Orval E. Faubus, “Proclamation,” Sept. 2, 1957, folder 4, box 496, subseries 1, series 14, Orval Eugene Faubus Papers, Special Collections, David W. Mullins Library, University of Arkansas, Fayetteville, Ark.

承不承ではありながらも1,200名もの規模の合衆国陸軍兵士をリトルロックへ送り込んだ末、黒人生徒達によるセントラル高校への入学を実現させたのであった。⁴²⁾ これら9名の黒人生徒達は事件の後、「リトルロック・ナイン」(“Little Rock Nine”)と呼ばれ、称賛をされ、そして黒人公民権運動史ナラティブの中で記憶され続けていくこととなるのであるが、その一方、公教育分野における「人種分離・隔離」という名の壁を崩すことの出来なかった、マンスフィールドの12名の黒人生徒達は、誰からも「マンスフィールド・トゥエルブ」と称されることがないまま、公民権運動史ナラティブにおいて、忘却の対象とされていってしまったのである。

1957年晩夏に起きたアーカンソー州都における「リトルロック・セントラル高校事件」は、アメリカ南北戦争終結後の南部再建期以降、黒人の市民・公民権擁護を目的とし、連邦政府が南部州に連邦軍を派遣した最初の出来事となり、その点においても同事件は、黒人公民権運動史ナラティブにおいて重要な地位を占めるものとされるのではあるが、このリトルロックでの出来事において、人種分離・隔離制度の温存を図るための手段としてアーカンソー州知事が用いた手段——「州権論」に依拠した手段——は、元来、その事件発生のちょうど1年前に、「マンスフィールド高校事件」においてテキサス州知事シヴァースにより用いられていたものが、その先例となっていたのである。アーカンソー州での「リトルロック・セントラル高校事件」の後も、1960年代の半ばに至るまで、ミシシッピ州知事ロス・R・バーネット (Ross R. Barnett) や、アラバマ州知事ジョージ・C・ウォーレス (George C. Wallace) に率いられた抵抗運動 (それぞれ、1962年9月の「ミシシッピ大学事件」と1963年6月の「アラバマ大学事件」) に見られた如く、公教育分野における「ジム・クロウ」制度死守を誓った南部諸州行政府長らによる、州権の援用と悪用が続けられていくのである。この点、1956年9月、マンスフィールド高校を半暴徒化した白人住民が取り囲む最中、同市在住の白人優越主義者が記者の質問に答えた折に、人種統合への移行を迫られているマンスフィールド高校は、「全国黒人地位向上協会」と連邦司法府から、まるで「実験材料としての扱い」を受けているかのようなようであると憤慨をし、「万が一、黒人生徒達が入学でもしようものなら、今後南部の至る所で同じことが起こるに違いない」との心情を吐露しているのであるが、まさに、この白人優越主義者による予見は正しきものとして、その後のアメリカ南部が辿る道のりにおいて、歴史に刻まれていくのである。⁴³⁾

⁴²⁾ Dwight D. Eisenhower, “Statement by the President regarding Occurrences at Central High School in Little Rock, September 23, 1957”; Eisenhower, “Radio and Television Address to the American People on the Situation in Little Rock, Arkansas, September 24, 1957,” both in *Public Papers of the Presidents of the United States: Dwight D. Eisenhower, 1957* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1958), 689–94.

⁴³⁾ *Fort Worth Star-Telegram*, Sept. 2, 1956.